

論文

性転換手術から両性具有の夢想へ

—ハンス・ハインツ・エーヴェルス『めっけ鳥』における進化論言説—

相馬 尚之

0. はじめに

グリム童話『めっけ鳥』では魔法により少年と少女が一体化しバラや教会に変身するが、20世紀初めからナチス時代にかけて活躍したドイツ人作家ハンス・ハインツ・エーヴェルス (Hanns Heinz Ewers 1871–1943) の小説『めっけ鳥』(Fundvogel, 1928) では、当時最新の科学技術によって驚異的変身が行われる。

現在ではあまり読まれないこの小説のあらすじを、まず紹介しておこう。主人公アンドレア・ヴォイラント (Andrea Woyland) は幼少期より祖母ロベルタ・フォン・ヴォイラント (Robertta von Woyland) の封建的所領で育ち、「めっけ鳥」とあだ名をつけられる。彼女は従兄弟ヤン・オリエスラーヘルス (Jan Olieslagers) に惹かれるが、彼との結婚は結局実現せず、彼女は女としての従属的かつ被虐的な生活に翻弄された末にアメリカに渡る。そこで彼女は、銀行家パーカー・ブリスコー (Paker Briscoe) の娘グウィニー・ブリスコー (Gwinnie Briscoe) からの恋慕に応じてレズビアン関係を異性愛化するため、また自身のこれまでの生涯と性別への嫌悪のため、ドイツで医師ヘラ・ロイトリンガー (Hella Reutlinger) による性転換手術を受ける決断を下す。手術自体は成功し、彼女はアンドレアス (Andreas) として男性の身分を獲得するが、恋人の新たな性を受け入れられずにグウィニーは自殺する。失意に沈む彼女のもとにヤンが現れ、祖母の死とアンドレアスが手術直後に性交した看護師ローズマリーの妊娠——実はヤンも彼女と関係があり本当の父は確定されない——を告げる。ヤンとの間に友愛が芽生えるのを感じた彼は、所領を相続し後継者を育てるため、故郷への帰還を決める¹。

『めっけ鳥』は、世紀末から戦間期におけるドイツでの同性愛を禁じた刑法の改正運動や国際的な女性解放運動の高揚、あるいは性ホルモンに関する研究の進展等を背景に、性転換手術を題材として執筆された最初期の小説であるとされる²。だがこの先駆的小説は、第一にエーヴェルス

の通俗的かつ煽情的な大衆作家としての評判³、第二に彼とナチスの親密な関係のために文学研究では長らく軽視された⁴。しかし彼は反ユダヤ主義者ではなく、また1937年には帝国文学院から全著作の発禁処分を受けており、ナチスとは思想的には相違する点も多いことから⁵、エーヴェルスの名誉回復とともに、近年では特にジェンダー論の観点から『めっけ鳥』の再評価が進められている⁶。

もっともこの小説は性転換手術を取り上げたが、必ずしも同性愛者解放運動に共鳴しているのではない。むしろアンドレアとグウィニーの関係が破綻し、アンドレアとヤンの間に精神的な紐帯が成立することから、保守的な男女規範および家庭像を称揚しているとされた。例えば文化科学者ジェイムズ・ジョーンズは、『めっけ鳥』における従兄弟同士の関係は、男性間の精神的繋がりを理想化しながらも肉体関係を嫌悪した第三帝国の理念に融和的であると指摘し、また独文学者アネッテ・ルンテも「男性化は、女という反対-性 (das weibliche Gegen-Geschlecht) を男性-同盟的 (männer-bündisch) に同化しようとする正常化に吸収される」⁸として、この小説が既存の性秩序の解体を描いたという解釈には懐疑的である。加えて独文学者イルメラ・マライ・クリューガー＝フューホッフとタンヤ・ヌッサーは⁹、従兄弟間の子の出現が告げられる終幕を「ホモソーシャルな同盟のハッピーエンド (Dieses happy end eines homosozialen Bündnisses)」¹⁰と評した。エーヴェルスは同性愛非刑罰化の請願への署名や性転換手術の素材化において先進性を示したが¹¹、作品には世紀末以降のドイツにおける男性同士の精神的紐帯の理想化が内包されており、彼のジェンダー観や人種観は同時代の潮流を外れていない¹²。

また作中で当時の自然科学、特にホルモン研究が援用されることから、この小説は文学と科学の関係を巡る学際的研究の観点からも注目された。エーヴェルスは『めっけ鳥』の執筆のため病院を訪問するなど、自ら調査を行い専門の知識を取り入れつつ当時の科学を諷刺したが¹³、文学と科学は単純な二元的対立構造にあるのではない。小説内

の性科学や人種観は同時代の自然科学を通じた性の病理化や規範化と不可分である¹⁴。科学言説は小説内への移植によって物語に説得力をもたらすのみならず、新たなコンテクストのなかで客観的および中立的とされる科学自体の規範性や権力性、恣意性を露にすることもあるのだ。

しかしこれらの研究は、性転換手術の真に迫った描写とセクシュアリティの諸問題に注目しつつも、『めっけ鳥』において繰り返し焦点化される「両性具有」という主題を十分に引き上げていない。この小説では、一方でナチスにも親和的な男性中心主義的意識が示されるが、他方で封建的な故郷や男性同士の友愛的関係ではなく、両性具有こそが真の理想であると登場人物の台詞等を通じて幾度も表明される。20世紀初め、両性具有が文学において重要な主題の一つであったことは疑いなく、『めっけ鳥』と同年にはイギリスの作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf 1882–1941) が『オーランドー』(Orlando, 1928) を出版しており¹⁵、またエーヴェルスも第一次世界大戦中に著した評論「男性的なこと—あまりに女性的なこと」(„Männliches – Allzuweibliches“) において、ギリシア美術や神の表象が両性具有を理想としたことを踏まえつつ、芸術家の創造性について次のように記している。

そもそも純粋に男性的ないし女性的な心理を持つような芸術家などいないのだ。シェイクスピアにおいて、またハイネ、ゲーテ、ダンテにおいて、典型的な女性的特徴を立証することは容易い。[...] 芸術的な創造作業は、両方を前提とするのだから、全くもって、完全に男男のあるいは女女の芸術家 (ein durchaus mann-männlicher oder weibweiblicher Künstler) などありえない。それは、生殖と、受精、懐胎、出産を求めるのだ¹⁶。

加えて両性具有は、20世紀初めに医学・生理学的のみならず、生物学的・進化論的に激しく論じられた問題であった¹⁷。これまでの学際的研究では、『めっけ鳥』と同時代の性科学の具体的成果の借用や思想的射程に関し、作中に登場するのみならずエーヴェルスとは直接的交流があった実在の性科学者マグヌス・ヒルシュフェルト (Magnus Hirschfeld 1868–1935) や¹⁸、彼の理論的土台となった生理学者オイゲン・シュタイナッハ (Eugen Steinach 1861–1944) の名が挙げられた¹⁹。しかし世紀転換期のドイツ語圏で絶大な影響力を有した生物学者エルンスト・ヘッケル (Ernst Haeckel 1834–1919) が、ヒルシュフェルトと協力して同性愛を進化論の観点から捉え直し、原始的生物における雌雄同体と「生物発生原則」から、個体内における男女両性の併存と同性愛の先天性の立証を試みたこと、またヘッケルの主張の影響が『めっけ鳥』に認められることは、これまで論じ

られてこなかった。

そこで本研究は『めっけ鳥』における両性具有表象に注目することで、同時代の内分泌学の発見のみならず、ヘッケルによる同性愛の科学的説明が、いかに作中に取り入れられたか明らかにすることを目指す。第1章では、性転換手術の場面の描写に現実のホルモン研究に加えて、男女の共生に基づく架空の手法が混淆されたことを示す。続いて第2章では、ヘラとヤンの謳うそれぞれの両性具有の理想を、未来志向の科学と過去への憧憬の対照から検討する。第3章では、ヘッケルの生物発生原則に従った原始的生物の雌雄同体からの人間の原初的両性具有の演繹を踏まえつつ、作中におけるヤンの蛭やホヤの理想化の意味を論じる。これらの分析から、同性愛者の理解や包摂に至らず排除をもたらした20世紀初めの生物学言説を、いかに『めっけ鳥』が受容し、歪曲し、諷刺したかを考察する。

1. 性転換手術の幕開け

——『めっけ鳥』における性転換描写

1.1. 「女」という性への嫌悪

アンドレアが性転換手術を受ける直接的契機は、グウィニーの彼女への恋慕と自殺未遂の結果、その父パーカーが、大金と引き換えに性転換手術を受け娘と結婚するようアンドレアに提案したためである。この点彼女の性転換は、性自認問題の解決策というよりは一種の人身売買であり、またそれは倒錯とされるレズビアン関係を男女異性愛へと転換し、異常から正常への回帰を実現するための技術的挑戦である。だがアンドレアの半生の回想における女という性に対する苦悩と男への羨望は、文化的な言説との混淆を通じて科学的性転換を予告しつつ、彼女の性を巡る潜在的葛藤を浮かび上がらせる。

アンドレアの女としての悲劇は、彼女と対を成す従兄弟ヤンへの従属と彼との不調和から生じており、幼少期から既に、彼の無節操な活動性のために彼女は犠牲となる。夏季休暇にクレージュ²⁰の所領を訪れたヤンは、水泳を教えるはずが彼女が水に慣れるや沼に入るよう命じ、彼女を餌として血吸蛭 (Blutegel) を採る。目算通り蛭は全身に食いついたが、彼はそれをうまく剥がせず、彼女は血まみれになってしまう。蛭は『めっけ鳥』において象徴的生物であり、同時代の作家ベリエス・フォン・ミュンヒハウゼン (Börris von Münchhausen 1874–1945) はこの小説について、「私は作家から、蛭は同時に男でも女でもあり、同時に孕み、孕ませることができるのだと聞いた。私は、これは蛭のための小説なのだと思った」²¹と評している。加えてこの生物の重要性は、この場面を執筆した際のエーヴェルスの妻への書簡からもうかがえる。

最後の手紙で蛭！（Blutegel！）について尋ねてくれてありがとう。それが僕にアイデアをくれて、今日は第2章の、生物たちについてのとてもかわいらしい小さなエピソードを書いた！！[また、それらの動物はいずれにせよ、小説で締めの言葉を言うだろう、あらゆる愛の最も理想的な生き物として！[…]]²²

この書簡は、エーヴェルスが執筆の初期に既に、終幕のヒルの再登場を構想していたことを記録するが、これについては後述するとして、まずはアンドレアの女という性への嫌悪と性転換に至る過程を検討しよう。

その後アンドレアは幾度も、常に遍歴しとどまることがないヤンに置き去りにされ苦悶する。この動的かつ搾取する男性と静的かつ搾取される女性という対称性は、いささか単純過ぎる男女二元論に依拠しているが、作中で反復される「彼は男であり、彼女は女なのだ。それだけだ」(87)というアンドレアの言葉によって補強される²³。彼女にとって女とは不自由および自己犠牲を意味しており、ヤンとの比較によりその人生の不遇は際立つ。

アンドレアのこの苦悩を解決する性転換の予感、まず自然科学ではなく、伝承の世界からもたらされる。ヴォイラント城の大広間にはアキレウス伝説を図案とする壁かけ絨毯が飾られており²⁴、これはニューヨークで、「当時彼女は少女アキレウスと似ていた。だが誰も、彼女を男にする剣を授けてはくれなかった」(86, 強調原文)と回顧される。また人文的系譜からは神話と並び聖人伝が参照され、ヤンはヘラを補佐する医師の説得にブリクセンを訪れた際、大聖堂内の礼拝堂で聖キエマーニスのフレスコ画を幻視する²⁵。この性転換に関する神話と自然科学の言説の重ね合わせについて、クリューガー＝フューホッフは、「生体臨床医学、神話、聖人伝と進化生物学からの様々な語りの型は互いに矛盾するかもしれないが、多様な知の領域の信頼できる語りの型を取り上げることは、実生物学と医学の新たなユートピア的可能性に意味を与え、またそれらを既知の文化的型に統合することに役立つ」²⁶と述べる。『めっけ鳥』は、性転換に至る道程にアンドレアの自らの性に対する違和感を据えつつ、多様な言説の参照によって、科学的な性の境界の超越を準備したのだ。

1.2. 『めっけ鳥』における性転換手術

それでは、小説における性転換手術の描写を検討していきたい。手術の経過は、『めっけ鳥』の第11章において、執刀したヘラによる他の医師や記者への報告として記される。ルンテはこの場面を「科学的倒錯と報道的視き見の『フリーク・ショー』」として描かれる医学会議²⁷と評したが、ヘラの講演では客観的説明が優勢であり、猥雑さは強調されない。加えてこの講演に前後する著名な科学者の列

挙および専門知識の解説は、物語内の科学に現実性と説得力をもたらす。ここで特に重要なのは、「ロイトリンガーに彼女の成功を嫉妬もなく認めてやる少数の一人」(402)とされるシュタイナッハと、「顧問官」(403) ヒルシュフェルトであり、特に後者には、以下のようにホルモンについて医学的事項を説明する役割が委ねられる。

下垂体（Hypophyse）とは脳の後葉（Hinterlappen）にある腺（Drüse）のことです。そのホルモン（Hormone）を成す内分泌物が、成長に影響します。同じく、腎臓の上のいわゆる副腎もホルモンを作り出す腺で、髄質や皮質（Mark- und Rindensubstanz）の構成に役立ちます。ホルモンとは、あれこれの腺によって作られた分泌物のことで、血管やリンパ腺を通して、他の器官の化学的な状態を決定し、栄養をあたえるものではありませんが、たしかにそれらの活動に決定的影響を及ぼします。(418)

小説において、アンドレアの半生に及ぶ長大な回想が自身の語りを通じた症例報告であるならば、ヒルシュフェルトの科学入門書的説明は、それを生理学的に補強する証拠の役割を果たす²⁸。『めっけ鳥』における性転換手術は、一方で現実の実証的科学知識の参照を通じて、医学的な実現可能性の範疇に展開される。だが他方で、客観的情報が提供され信頼性が装われるにつれて、非専門家による理解は一層困難になり、学術用語を濫用する専門家に対する反感が強まる。この小説はヒルシュフェルトによるホルモンの解説の挿入によって、権威主義的な科学に対する不信感を呼び覚まし、機械的に生命現象を説明する精密科学の大衆からの乖離を批判する。

さらに『めっけ鳥』は、作家の独自の空想に依拠した手法を混淆させることで手術を現実性と不確定性の狭間に宙づりにする。ここで興味深いのは、性転換の過程に架空の方法が織り込まれるに従って、両性具有が強く連想させられることだ。アンドレアの手術は大きく三段階に分けられ、初めに女性器の切除とホルモン投与、次いで催眠療法による手術の記憶の操作、そして最後に男性器の移植が行われる。「卵巢、卵管、子宮の摘出」(410)が行われる第一の非女性化の過程は、実際の医学に即しつつも科学への嫌悪を引き起こすように描かれる。アンドレアは「なんとも素晴らしい素材（Material）」(315)として客体化され、また科学は人々を搾取する営為として資本主義と共に批判される。彼女の皮下に移植される「生殖腺（Keimdrüsen）」(410)は、男性たちがわずかな金銭のために自らの肉体を切り売りしたことで集められたのだ²⁹。

この第一の施術は成功したもののアンドレアは強い鬱状態に陥ってしまい、手術の第二段階として、ブダペストか

ら医師ベラ・アラニー (Bela Aranyi) が呼ばれ催眠療法を施す。アンドレアから手術に関する記憶を取り除くこの療法の医学的基礎については詳述されないが、エーヴェルスの創作性と同時に、男女二性に分類されない中性的存在が出現するのはこの段階であり、それはヘラが手術の漸進的経過を次のように説明することで示される。

最初の根本的な手術によって、女性の要素は根絶されましたが、男性的なもので置き換えられたものではありません。幼虫 (Die Raupe) はもうおらず、繭を作りました。私の患者の精神の周りに覆いができ、彼女は蛹の薄暮の生 (das Dämmerleben einer Puppe) を生きています。「彼女」(,sie⁴) から「それ」(,es⁴) になりました。今度はこの「それ」を、「彼」(,er⁴) に変えねばならないのです。(413, 強調原文)

この「それ」の段階に既に性の二元論の止揚が示唆されるが、続く第三段階においても既知の科学とは異なる性の統一の試みが描かれる。この手術を執刀したファルメライヤー博士は、性器提供者となった踊り手のイフォから精巣やペニス等をアンドレアに移植する際に、それらが両方の身体に繋がれている約4週間の「共生の期間」(415)³⁰を設けて段階的な癒着を待ったことを報告する。このような手術は実際には不可能だが、重要なのは免疫学の拒絶反応に関する見識ではなく、現実の科学を超越した男性化の試みが両性の融合に基づいて構想されること、すなわち性の越境のみならず両性具有の可能性が問われることだ。性的形質や性欲をホルモンに還元し、人為的に操作可能とみなす実証的科学観の発展した時期に執筆された『めっけ鳥』における性転換手術は³¹、実在する科学者や生物学的用語の成果の挿入によって信頼性を装いつつ、両性具有の構想を契機に現実の科学を逸脱し始める。そしてこの両性の統一への憧憬は、性転換を超えた願望として繰り返し表明されることになる。

2. ヘラとヤンの両性具有の夢

2.1. ヘラ・ロイトリンガーの「馬鹿げた冗談」

『めっけ鳥』において、性転換の先にある両性具有への期待をまず表明するのは、手術を行ったヘラ自身である。講演の直後に彼女は記者やヒルシュフェルトを前に、彼の運動は表面的であると揶揄しつつ、医学の将来について以下のように語る。

記者さんたちは、ベルリンに来ることがあれば、マグヌス顧問官があなたたちに性科学研究所であらゆる奇妙な人々を紹介して楽しませてくれますよ。彼は、男

性的に感じる女性 (männlich empfindenden Frauen) に男装する許可が与えられ、また反対に同性愛の男性 (homoeerotische Männlein) が女性の服であちこち歩きまわってもよいと、警察署で押し通すことを義務だと考えているんです。[...] 残念ですが、このベルリン流メタモルフォーゼ (Berliner Metamorphose) はただ全く表面的——見掛け倒しなのです (oben hui, unten pfui)。スカートの下とズボンの中は、すべてが古いまま。ですが将来は、違ったことになるでしょう。自然の誤り (die Irrtümer der Natur) は修正され、魂の認める性が誰にでも与えられるでしょう (jedem Menschen das Geschlecht geben, zu dem sich seine Seele bekennt)。(429–430)

ヘラは服装のみならず肉体を魂の性別に応じて変えることを訴えており、これはヒルシュフェルトが肉体的な性転換を異性装の極致とみなし、「この肉体服装倒錯的 (körpertransvestitischen) 強迫状態の最高段階は、程度の差はあれ性器の完全な変換に努める、すなわち、特に性器を魂に従って (nach ihrer Seele) 形成しようと望む者たちに観察される」³²と述べたことと重なり合う。生得的身体そのものを心理に応じて可塑的に扱う点に、性的逸脱をホルモン異常に還元する単純な医学的病理化とは異なり、性を個人のアイデンティティの問題とする新たな視座の萌芽が認められよう。だが、科学を自然に反した営為ではなく³³、むしろ「自然の誤り」を修正する技術とみなす不遜によって前進するヘラは——目下のところ、これは「馬鹿げた冗談」(431)であり、「サテュロス劇 (Satyrspiel)」(431)と弁明せねばならないとしても——男性による妊娠出産の可能性を展開することで、性転換を越えた男女の性の一体化を次のように思い描く。

もし脱男性化された男に (dem entmannten Manne) 子宮を移植できたら——どうしてそれが妊娠した子宮でないことがありましょう。さらに、彼自身があらかじめ妊娠させた子宮なら。考えてみてください、そうしたらあなたたちは自分自身で設けた子供を宿し、産むことができます——父と母が、一人の人物のなかにあることになるのです! (so könnten Sie das von ihnen selbst gezeugte Kindlein austragen und gebären — wären Vater und Mutter in einer Person!) (430–431)

ヘラの父母の統一の空想は、物語上アンドレアスによって部分的に実現される。手術を受け「括弧にいられた小文字の『s』の助け」(444)により男となったアンドレアスは、グウィニーとの恋愛の破綻にもかかわらず、看護師ローズマリーと性交し彼女を妊娠させることで、一方で男あるい

は父としての能力を立証する³⁴。しかし他方で彼は、ヤンとの関係において男として明示されない。というのもアンドレアスは、ヤンの「僕のか、君のか——同じことじゃないか。僕たちの子供だ」(532)という台詞によって、本当に父か未確定に留められるばかりか、ヤンと子に対してそれぞれ妻と母の役割を引き受けることで、この看護師を介したホモソーシャルな従兄弟同士の絆を、子供を介した『『歪んだ』核家族の理想』³⁵へと変質させるからだ。『めっけ鳥』の終幕は、二人の身体上の父とその子供の誕生において、保守的な男性同士の友愛および男のみの繁殖への憧れを展開するが、同時にアンドレアスは、身体的男性性と精神的女性性、つまり父母の二重性を内包した存在に留まる。

もっともアンドレアスが父母の両面を備えた両義的存在であるとしても、実際に子を産むのはローズマリーであり、ヘラの示唆した完全な、生殖における性分業を超越した両性具有者は実現していない。現実のホルモン学の成果を踏まえつつ性転換手術を実現したヘラは、将来の性の自由な操作の一例として父母の統一を夢想するが、男同士の繁殖は実現せず代理母を必要とする以上、さしあたりは部分的成功で満足せねばならないことになる。

2.2. 原始的生物への退行——ヤンの蛭への憧れ

別様の両性具有への憧憬、そして男女両性の真の統一は、ヤンによって表明される。医師ヘラの科学の進歩と将来を確信する技術主義的不遜に対し、彼の夢想は自然の中の蛭と結びつきながら、失われた過去に目を向ける。原始的な生物である蛭は、先述のように幼少期にはヤンによるアンドレアの搾取の動因となったが、終幕では科学批判とホモソーシャルな紐帯の称揚の先に浮かぶ理想を担うことになる。

技術上の成功にもかかわらず性転換手術はグウィニーの自殺に終わり、同性愛者の解放も異性愛化による性規範の回復も達成されなかった。代わりに『めっけ鳥』は、従兄弟同士の絆と「ヴォイラントの血 (Woylandblut)」(532)を引く継承者の誕生を結末としたが、ヤンはそこで、不遜な科学の劫罰と女性嫌悪の帰結としての封建的所領の再興とは異なる両性具有の理想を、蛭を称えることで以下のように提示する。

僕たちは、男と女は、みじめな人間なんだ——半分だけの生物なんだ。蛭か、月の人間 (Mondmenschen) だったらよかったんだ。そうしたら、愛を生きる価値があっただろうに。

[…]

そして、すべてがうまくいって、僕らは全く完全だっただろう。蛭は、同時に男でも女でもあるんだ

(Sie sind Mann und Weib zugleich, die Bluteigel) ——知っているだろう、めっけ鳥、奴らがどんなに君を噛んだかさ。蛭は賢い生物なんだ。電話やラジオ、車や飛行機についてはもちろん何も知らないけれど、愛については、僕らをはるかにしのいでいる。蛭は男として子を設け、女として授精する——同時に、そして二重の欲の内に。(Sie zeugen als Mann und empfangen als Weib — zu gleicher Zeit und in doppelter Lust.) 同じことを、月の人もするけど——プラトンが彼らを考え出して、『饗宴』のなかでそれについて話したんだ。考えてみる、めっけ鳥、僕らが月の人々だったら！(533–534)

男同士の絆あるいは疑似的な家族を超越した、個体内における男女両性の一体化の理想を——それも「男の身体に女の魂」という心身二元論的な併存ではなく³⁶、生殖における生物学的な身体の共存を——ヤンは蛭に見出し、この生物の非技術性と愛における優越を強調する。両性具有は技術とは無縁な生物において、自然の内に既に実現しているのだ。そのためヤンが両性具有の理想を具現した存在として蛭を挙げることは、ヘラの性の医学的統御を目指す不遜な進歩主義的科学技術への熱狂に対する揶揄となり、また技術発展が自然の御業以下にとどまると示唆する。だがこの生物の参照とそれに込められた思想的含意は、同時代の両性具有と同性愛に関する進化論的説明を踏まえ、より仔細に検討される必要がある。

3. 両性具有と系統発生

3.1. 人間の両性具有と同性愛の進化論的説明

——ヘッケルとヒルシュフェルトの邂逅

蛭の両性具有がなぜ同性愛問題にとって重要であったのか、ヘッケルとヒルシュフェルトの接近から論じていきたい。進化論をドイツに広めた生物学の大家ヘッケルは、科学入門書『宇宙の謎』(*Die Welträtsel*, 1899)の執筆やドイツ一元論者同盟の設立等を通じて、科学啓蒙活動にも絶大な影響力を有した。彼はヒルシュフェルトと1912年頃から直接的交流があり³⁷、彼の編纂していた『性的中間段階年報』(*Jahrbuch für sexuelle Zwischenstufen*)への寄稿を依頼された際には、これに応じて論文「雌雄異体と雌雄同体」(„Gonochorismus und Hermaphroditismus[sic!],“ 1913)を著し、以下のように人間の原初的な両性具有を論じた。

とりわけ脊椎動物の性形成の理解に重要な真実は、人間においてさえ、内外の性器官の胚原基はオスにおいてもメスにおいても同一であり、その形質的な相違は個体発生の内に初めて漸進的に表れるということだ。普遍的に有効な生物発生原則 (dem allgemein gültigen

biogenetischen Grundgesetz) に従って、脊椎動物の最も古い祖先さえ**雌雄同体**であり、性的分業は系統発生のうちに次第に、現在支配的な**雌雄異体**に至ったと結論してもよからう³⁸。

同性愛問題の生物学的説明における両者の共通目的は、端的に言えば、あらゆる生物は本来両性具有であると証明することであった。ヒルシュフェルトは、最初の論考『サッフォーとソクラテス』(*Sappho und Sokrates*, 1896)において「**原基では、あらゆる人は肉体的および精神的にふたなりである (körperlich und seelisch Zwitter)**」³⁹と記したように、人間には元来男女両方の資質があると考えた。彼によれば、例えば男性の同性愛や異性装といった倒錯は男性内の生まれつきの女性的気質が強く発現するためとされる。障害を理由に障害者を処罰することが非倫理的であるのと同様に、原基に起因する同性愛によって同性愛者を断罪するのは不当である、というのが彼の解放運動の主意であり、同性愛の非刑罰化を求める帝国議会への請願においても、同性愛は「この最初は謎めいて見えた現象の**原因は、人間の両性的 (両性具有的) 原基に起因する発生条件によって課されて**おり、したがって、そのような感情傾向を持つ個人に道徳的責任を期すべきではない」⁴⁰と記された。

ヘッケルはこの主張に進化論的根拠を提供した。というのも個体発生は系統発生を反復する——各個人は受精卵から胚を経て胎児になる過程で、人類の進化の歴史を短縮して再演する⁴¹——という生物発生原則に従えば、原始的生物が雌雄同体であるならば、人間も個体発生の最初の段階では両性具有であることが科学的に説明されるからだ。ヒルシュフェルトは『性科学』(*Geschlechtskunde*, 1926)において、先述のヘッケルの論文と生物発生原則に言及したうえで、次のように記している。

私たちは、男性および女性の個々の種類の可能な限り誠実かつ偏見無き観察において、自ずと、極を成す完全な男性と完全な女性の間 (zwischen den extremen Vollmännern und Vollweibern) に長い系列を形成し、男性的および女性的形質の混淆形 (Mischformen männlicher und weiblicher Eigenschaften) がきわめて多様に認められる、多くの性の類型に到達する⁴²。

加えてヒルシュフェルトはこの引用の後に、性の多様性を捉えた例としてインドの『カーマスートラ』(*Kamasutra*)とプラトンの『饗宴』(*Gastmahl*)に言及している⁴³。この科学解説書においても男女の混淆性は、『めっけ鳥』におけるヤンの台詞と同様に、原始的生物の雌雄同体と古代ギリシア哲学の重ね合わせから類推的に説明された。『めっ

け鳥』と『性科学』は、小説と科学入門書という形式的相違はあるが、いずれも同時代のホルモン研究のみならず進化生物学と哲学を参照した諸言説の学際的接合によって、既存の男女二元論の所与性を否定する。

しかし科学史的に見れば、生物発生原則を濫用した同性愛の説明は、その理論が戦間期には既に否定されつつあったのみならず、同性愛の原因となる両性具有を未発達な段階とみなす点で問題を含んでいる。歴史家シンシア・イーグル・ラセットは、反復説は西欧の白人男性を進化の頂点に据え、子供や女性、未開民族といった存在を進化の途上にある不完全な男性として排除する枠組みであったと指摘する⁴⁴。例えば人類学者ポール・トピナール (Paul Topinard 1830–1911) は、生物発生原則を援用して障害の原因を次のように説明する。

ヘッケルは、「ある種のあらゆる個体がある存在のごく初期から通過する一連の多様な形態は、つまるところ、現存する種の祖先、先祖が地質学的な途方もない期間に通過した種の多様な形態の、短く急速な要約である」と述べた。発生ないし胚の停止や倒錯に及ぶ一連の奇形学的症例は、このように説明される。口唇裂、多指症、小頭症は、いわば進化の法則の躊躇であり、前の形態のままの地点で停止するか、あるいは他の古い方向に進む試みである⁴⁵。

不完全な発生が障害をもたらすというトピナールの主張は、ヒルシュフェルトによる同性愛の説明にも認められる。彼にとって同性愛は、アノマリーな発生によって引き起こされる口唇裂や尿道上裂と同様の生物学的「**生まれつきの奇形 (Mißbildung)**」⁴⁶であった。彼は非刑罰化を訴える際に同性愛の先天性の科学的立証を試みたが、ヘッケルの援用は、白人異性愛者を最高次の発生段階とする枠組内における、同性愛者の原始的生物に近い未発達な存在としての分類に通じている⁴⁷。生物発生原則から導かれる人類を含むあらゆる生物の原初的両性具有状態という命題は、あらゆる人間に男女双方の資質を認めるための生物学的論拠であったが、異性愛を正常な発生状態とみなす性規範自体が解体されない限り、同性愛は非典型的な発生が引き起こす異常とみなされた。

たしかに同性愛の先天性の生物学的説明を目指したヘッケルとヒルシュフェルトは、系統発生史上の雌雄同体から性の二元論の所与性を否定し、完全な男性あるいは完全な女性は理念に過ぎないと訴えた。だがそれは、同性愛の(疑似)生物学化ではあっても、やはり同性愛者の社会的解放ではなく、また科学的解放でさえなかった。生物発生原則は、彼らの身体に両性具有というカテゴリーを新たに押し付け、劣等者として貶める原理であった。

3.2. 進化論の挫折とアンドレアの変身の含意

ここで改めて、『めっけ鳥』における両性具有の進化論的説明の機能について検討したい。小説において、ヤンとヘッケルの関係は一義的ではない。というのも一方でヤンは、ヘラの講演の準備のために講堂を過剰に飾り立てた際に、ヘッケルの肖像画の上に「宇宙の謎をあなたは私たちに贈りました／ですがあなたは、それをよく考えませんでした」(382)と標題を掲げたように、ヘッケルと彼に連なるヘラの追求する生命現象の機械論的理解や人為的操作に対し辛辣な批判を加えるのだが⁴⁸、他方でより原始的な生物に生の理想的様相を見出す際に、ヘッケルを利用しているからだ。彼はアンドレアスに対し、ホヤを引き合いに自身の人生観を次のように説明する。

海の中を素晴らしい動物が泳ぎ回っているんだ、ホヤ(Seescheiden)っていうんだ。[...] だけどそれは若者だけ、幼生だけなんだ。奴らは年を取ると良い市民性を自覚してしまう。定住して、視覚も聴覚も、彼らの持つ最高のもの、脊索と神経管を失ってしまう。そのために彼らは細胞物質を切り取って、覆いを作って、団子に、塊になってしまう(verklumpen und verknohlen)。[...] 僕は塊の団子(kein knolliger Klumpen)にはなりたくない。何とかなる限りは、自由に海の中を泳ぎ回っている(frei umherschwimmt)若い幼生(eine junge Larve)でいたいんだ！(299-300)

蛭の場合と同様に原始的生物に理想を投影するヤンのこの叫びは、ヘッケルによる脊椎生物とも共通祖先を有するとされるホヤの解説と、対象のみならず「脊索」や「塊」、「泳ぎ回る」といった単語の使用においても、以下のように類似する。

自由に泳ぎ回るホヤの幼生(die frei umherschwimmenden Larven der Aszidien)は、脊髄と脊索に向かう明白な原基をナメクジウオとまったく同じように発展させる。もっともそれは、脊椎動物の肉体に最も重要なこの器官をこれ以上は発達させない。そればかりか、それは退行的に変化し、海底に付着し、もはや外見を見ただけでは動物と思われない不格好な塊(unförmlichen Klumpen)に育つ。中枢神経系の原基としての脊髄と脊柱の最初の基礎としての脊索のみが、脊椎動物に特徴的な器官であり、この重要性から、脊椎動物と尾索動物の系統親類性が推論される。もちろん私は、脊椎動物は尾索類の子孫であると言うつもりはなく、ただ両集団は共通の根に由来しており、尾索類は無脊椎動物の中で、脊椎動物に最も近い縁者であると言いたいのだ⁴⁹。

もっともヤンは同時代の生物学の成果を援用しているが、それはヘッケルの無批判な受容ではない。むしろ彼は成長を退行として逆説的に捉え、未発達な状態を称揚することで、現在ないし将来に理想的な到達点を想定するような進化論の通俗的かつ目的論的理解を揶揄する可能性を拓く。固着化する以前の自由なホヤあるいは雌雄同体の蛭に理想を見出す彼にとって、——『饗宴』で男女に切断される前の「月の人」(534)が説かれたように⁵⁰——両性具有は同性愛の原因としての不完全な発生状態ではなく、性を統一した原初的完全状態である。彼には系統発生史は、雌雄同体の単細胞生物から性分化を経て遂には頂点たるヒト——より正確には白人男性異性愛者——に至る進歩の道筋ではなく、未来に代わり過去に向かうための導線となる。ヘッケルの言説を参照しつつも、人類発生史において性の統一はむしろ退化したと示唆することで、ヤンはヘラが目標とする将来の父母の一体化のみならず、ヘッケルやヒルシュフェルトの用いる反復説が含意する性分化=高等と両性具有=下等という二項的構図に異を唱える。蛭への先祖返りの羨望を表明するヤンにとって、人類の原初的両性具有とそこからの性分化を説くヘッケルの説明は、性の統合も同性愛者の解放も保証しない不毛な理論であった。

ヤンはヘッケルの肖像を戯画化するのみならず、蛭を理想化することで、同性愛の進化論的解決を疑問視する。進化と進歩の緊密な連想を濫用し、同性愛を一種の先祖返りの退行、また性分化すなわち異性愛者化を進歩と捉える限り、同性愛者は未発達な存在に科学的に貶められてしまう。この同性愛者に両性具有という新たな性を賦与する進化論への懸念は、ヤンが「人形(Puppe)」(319)に過ぎないとみなしたアンドレアによっても示唆される⁵¹。彼女の身体を「供物」(301)として差し出す性転換手術の第二段階において、彼女は蛹(Puppe)の隠喩を通じて儚い両性具有状態を具現するが、かつて彼女を犠牲にしたが蛭をうまく剥がせなかった拙い狩りは繰り返され、憧れの生物は彼の手をすり抜ける。手術の前にヘラがヤンに実在のロシアの生物学者イリヤ・イワノフ(Ilya Ivanov 1870-1932)らの人間とサルを交配させ⁵²、「人間と動物の間の境界を消滅させる生物」(327)を創造する試みを紹介するのは、同時代の煽情的な自然科学の唐突な挿入に留まらない。『めっけ鳥』における性転換手術は、性のみならず種の壁を超える過程であり、アンドレアは女という性を喪失し男へと変態する手術の第二段階、すなわち『『それ』』(413)の状態において、以下のように繭に籠り、原始的生物から人間に至る系統発生史を辿る。

だが彼女は自分の中で何か新たな生命が育つのを感じた。数ヶ月の間は違っていた。彼女はただ静かに穏やかに、ほとんど動くこともなく、そこにいただけだっ

た。植物のようだった。しかしその後、ゆっくり、ゆっくりと、芽が出てきた。狭い覆いの中に固く締め付けられていたが——この覆いは溶けた。これは日に日に柔らかく溶け、彼女の肺は自由に呼吸した。まるで翼が生えるかのようで、もうすぐ彼女は空高く飛び上がるだろう。(388, 強調原文)

ここでヌッサーは、アンドレアの人生をダーウィンよりもゲテ進化論的なメタモルフォーゼとして捉え、「ゲテ的進化論概念に従えば、外科的介入による蛹化過程として想像される性転換は、物語的に、進化的発生の一部である(変)形成として位置づけられる」³と指摘する。たしかに植物から肺呼吸や鳥類を経て人間化する過程は、より古典自然哲学的な生命の階梯モデルに倣っており、ヘッケルの唱えた共通祖先からの分化とは異なる。しかし性の変化に着目すれば、アンドレアの彼女-それ-彼(sie-es-er)の過程は、分化した性の先祖返りによる(再)両性具有化と、そこからの(再)個体発生のプロセスでもある。種の境を超えて系統発生史に没入した彼女は、生物発生原則に従い、生命の原初的段階から新たな生命として、男へと(再)性分化を開始するのだ。しかし性の統一は未発生な段階にのみ存在する以上、アンドレアのアンドレアスへの変態は性の和合の消失を伴い、発生の進んだ男女二元論的世界には悲劇が待ち構えている。

『めっけ鳥』におけるヘッケルの援用は、決して人間の同性愛の系統発生史に依拠した説明の無批判な借用ではない。ヤンは人間ではなく原始的生物である蛭やホヤを理想化した。またアンドレアは性転換の過程で系統発生史に没入し両性具有への先祖返りを具現しつつも、そこからの性分化において儚い性の合一をたちまち喪失した。この小説は、進化の頂点に異性愛者の白人男性を据える通俗的かつ目的論的進化論解釈を反転させ未分化な状態を称えることで、ヘッケルらの両性具有の科学的説明は、それが内包する性分化と進歩の連合のために同性愛者を救済せず、却って未発達な存在に貶めてしまう危険を示唆している。

4. むすびに

『めっけ鳥』は、同時代の自然科学を取り込みつつ、性転換手術の可能性と限界を描き出した。大衆から乖離した精密科学およびホルモンに依拠した生命現象の機械論的探究は、手術の場面において直接的に批判され、また外科的介入自体の成功にもかかわらず同性愛の異性愛化が失敗に終わることで、技術的な愛の統制は挫折した。しかしこの小説では、男女の共生に依拠する架空の手術法、将来における父母の統一の夢想、そして蛭の雌雄同体の賞賛によって、男女の性の境界の横断を超えた両性具有への憧れが提

示される。真の理想は、性転換手術が試みた同性愛の異性愛化でも、従兄弟同士のホモソーシャルな懐古的共同体の成立でもなく、両性の一体化であった。

『めっけ鳥』に描かれる両性具有の諸相は、同時代のホルモン学説のみならず進化思想、とりわけヘッケルの生物発生原則による原初的雌雄同体と進化過程の性分化から構想された。性転換手術の延長上に子宮移植による父母の統一を夢想するヘラに対し、ヤンは系統発生史を参照し両性具有の理想を将来の技術的可能性から自然状態へと反転させることで、進歩主義的な科学技術を揶揄した。しかし進化論を濫用する彼も両性具有には到達できず、アンドレアは儚い「それ」の段階から男としての再性分化を通じて、レズビアン関係の破局と男同士のハッピーエンドに向かう。万物の霊長たるはずの人類は、性分化した男女二元論的世界において、幸福を手にすることができない。『めっけ鳥』における医療と蛭を通じた両性具有の賛歌は、科学技術の将来は自然界において遙か昔より既に実現されていたが、その未来にも過去にも決して到達しないことを笑い飛ばすサテュロス劇であった。

加えてこの小説は、原始的生物に対する先祖返りの憧憬によって、系統発生史に従った両性具有の解明が同性愛問題の解決に寄与しないことを明かす。確かにヘッケルとヒルシュフェルトは、同性愛の原因となる先天的な両性具有の科学的説明をもたらしたが、性分化が高等生物への進化の途上で生じたとみなす以上、両性具有は下等な状態に分類されてしまう。生物発生原則は、科学の名のもとに同性愛者を未発達な存在として分類しうるのだ。同時代の性に関する科学言説を戯画的かつ煽情的に移植した娯楽小説『めっけ鳥』は、科学技術の進歩主義的傲慢を揶揄するのみならず、人類を頂点に据える通俗的進化論を転覆させたことで、同性愛者の解放を謳いながら社会的包摂を促進しないばかりか、彼らの一種の劣等者としての病理化さえ引き起こす自然科学の錯綜を諷刺の射程に収めている。

[付記] 本論は日本学術振興会科学研究費助成事業(特別研究員奨励費: 研究課題番号19J14355)の研究成果の一部であり、ドイツでの資料調査に東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター奨学助成金(ZSP)を受領した。

¹ Hanns Heinz Ewers. *Fundvogel: Die Geschichte einer Wandlung*. (Berlin: Sieben Stäbe-Verlag), 1928. 以下同書からの引用は、本文中に頁数のみを記す。

² 「手術による性転換を中心的な主題とした、私見では、最初の(通俗)小説」。Annette Runte. *Biographische Operationen: Diskurse der Transsexualität*. (München: Wilhelm Fink, 1996), S. 392.

³ Marion Knobloch. *Hanns Heinz Ewers: Bestseller-Autor in Kaiserreich und Weimar Republik*. (Marburg: Tectum, 2002); Barry

Murnane und Rainer Godel (Hrsg.) *Zwischen Ästhetisierung und Popularisierung: Hanns Heinz Ewers und die Moderne*. (Bielefeld: Aisthesis, 2014).

⁴ Wilfried Kugel. *Der Unverantwortliche: Das Leben des Hanns Heinz Ewers*. (Düsseldorf: Grupello, 1992), S. 302–344.

⁵ Kugel, S. 357–358. Klaus Gmachl. *Zauberlehrling, Alraune und Vampir: Die Frank Braun-Romane von Hanns Heinz Ewers*. (Norderstedt: Books on Demand, 2005), S. 41–54.

⁶ 独文学者クリスティアン・クラインは、エーヴェルスが初期作品から同性愛を扱ったことを踏まえ、『めっけ鳥』や『ホルスト・ヴェッセル』でもナチスが看過できない同性愛関係が描かれたと指摘する。Christian Klein. „Wanderer zwischen den Welten: Der Schriftsteller Hanns Heinz Ewers zwischen Homosexuellenbewegung und Nationalsozialismus.“ In: *Das sind Volksfeinde! Die Verfolgung von Homosexuellen an Rhein und Ruhr 1933–1945*. Hrsg. von Centrum Schwule Geschichte. (Köln: Emons Verlag, 1998), S. 75–86.

⁷ 「小説は、相当に非伝統的なハッピーエンドにもかかわらず、伝統的かつ保守的な国家社会主義のイデオロギーを支持している。というのも、肉体ではないにせよ欲望においてヘテロな家族を再生させ、レズビアンは肉体においても欲望においても根絶しているからだ。」James W. Jones. “Acceptable Homosexual Heterosexuality: Hanns Heinz Ewers’s “Fundvogel” and National Socialist Ideology.” *International Journal of Sexuality and Gender Studies*, 6. 4 (2001): 319–332, here p. 331.

⁸ Runte, S. 392. 概して男性同盟は性的要素を含み、ホモソーシャルは直接的肉体関係を排除するとされるが、注8, 10の引用が示すように、性が入り替わる『めっけ鳥』およびその論考において両者の区別は必ずしも明快とはならない。しかしアンドレアの女としての不遇と、男性化したアンドレアとヤン間の性的関係の不在から、エーヴェルスの理想が男性同士の精神的な絆にあることは確かであろう。

⁹ 加えてヌッサーは文学上の女性を排した生殖の系譜から、『めっけ鳥』も男性の単為生殖願望を反映しているとして、エーヴェルスの女性嫌悪的傾向を指摘している。Tanja Nusser. »wie sonst das Zeugen Mode war«: *Reproduktionstechnologien in Literatur und Film*. (Freiburg im Breisgau: Rombach, 2011), S. 148–162.

¹⁰ Irmela Marei Krüger-Fürhoff und Tanja Nusser. „Die Fabrikation des Menschen: Literarische Imaginationen von tissue engineering, Reproduktionstechnologien und Transplantationsmedizin im ersten Drittel des 20. Jahrhunderts.“ *Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur*, 33 (2008), S. 72–93, hier S. 90. 本稿では、原文の「分ち書き」を本文では「ゴシック体」とし、「イタリック体」には「傍点」を付した。別途注釈の無い場合、以下同様として強調原文とのみ記す。

¹¹ Kugel, S. 62.

¹² 執刀医ヘラはユダヤ系の女医であり、ヤンに「ユダヤ女 (Jüdin)」(320) と呼ばれる。エーヴェルスはナチスの政策に必ずしも賛同していなかったが、国粋主義者かつ人種主義者であったことは否定できない。Monike Manczyk-Krygiel. „Weibliche Behinderung, Sexualität und Macht: Überlegungen zu Max Hermann-Neiße, Hanns Heinz Ewers und Veza Canetti.“ In: *Auch in Neisse im Exil. Max Hermann-Neiße. Leben, Werk und Wirkung (1886–1941)*. Hrsg. von Beata Gíblak und Wojciech Kunicki. (Leipzig: Leipziger Universitätsverlag, 2012), S. 298–317, hier S. 300.

¹³ Kugel, S. 62, 283–284.

¹⁴ Annette Runte. „(Er-) Kranken am Geschlecht.“ Zur Inszenierung des „Mannweibs“ als Knäbin in medizinischen und literarischen Diskursen der Zwanziger Jahre.“ In: *Krankheit und Geschlecht: Diskursive Affären*

zwischen Literatur und Medizin. Hrsg. von Tanja Nusser und Elisabeth Strowick. (Würzburg: Königshausen & Neumann, 2002), S. 195–214. Vgl. Krüger-Fürhoff und Nusser, S. 93.

¹⁵ ウルフの理想の芸術家像としての両性具有については、杉山洋子「隠し絵のロマンス——伝記的に」ヴァージニア・ウルフ『オーランド』杉山洋子訳、ちくま文庫、1998年、297–324頁、314–316頁。もっとも澁澤龍彦は、「凡百のデカダン作家にとっては、アンドロギュノスは単に二つの性が解剖学的に共存しているところの、一個の奇怪な肉体に過ぎない。性の総合としての一つの完全性が問題なのではなく、病理学的なエロティックの可能性のみが問題なのである」と評している。澁澤龍彦「アンドロギュノスについて」『夢の宇宙誌——コスモグラフィア・ファンタスティカ』河出文庫、1984年、163–219頁、170頁。

¹⁶ エーヴェルスの両性具有の理想化は、一方でシェイクスピアやゲーテの理想視において男性中心的視点を示すが、他方で女性選挙権への賛意や作家セルマ・ラーゲルレーヴ (Selma Lagerlöf 1858–1940) に男性的特徴を認める等、同時代の女性の活躍を取り込んでいる。Hanns Heinz Ewers. „Männliches – Allzuweibliches.“ (Nachlaß von Hanns Heinz Ewers im Heinrich-Heine-Institut, Düsseldorf).

¹⁷ ミシェル・フーコー『性の歴史 I——知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年、55–56頁。

¹⁸ ヒルシュフェルトは、小説家アルフレート・デーブリン (Alfred Döblin 1878–1957) の『二人の女と毒殺事件』(*Die beiden Freundinnen und ihr Giftmord*, 1924) といった同時代の小説にしばしば登場する、性科学の代表的人物であった。Andreas Kraß. »Meine erste Geliebte«: *Magnus Hirschfeld und sein Verhältnis zur schönen Literatur*. (Göttingen: Wallstein Verlag, 2013).

¹⁹ Nusser, S. 149–152.

²⁰ クレーヴェ (Kleve) は、オランダ国境近くのドイツの町であり、エーヴェルスは一時期この地のギムナジウムに通っていた。Kugel, S. 22. クレーヴェ郊外にはモイラント (Moyland) 城があり、これが小説の舞台であると考えられる。

²¹ Börries von Münchhausen. „Hanns Heinz Ewers Fundvogel.“ In: *Königsberger Allgemeine Zeitung* (Zweite Beilage, 7. 6. 1929), ohne Pagina. 強調原文。

²² Hanns Heinz Ewers an Josephine Ewers. 16. 08. 1927. (Nachlaß von Hanns Heinz Ewers im Heinrich-Heine-Institut, Düsseldorf). 「姪」の二重線のみ実際は五重線であり、他の強調は原書簡通りの本数である。

²³ 例えば、アンドレアは第一次世界大戦時に工員としてロンドンに潜入し、色仕掛けで機密を盗み出す。同時期にヤンも同じ手法で同様の任務を果たしたのにもかかわらず、彼女だけが露見して刑務所に収監され、戦後も苦悩を感じ続ける。この出来事について彼女は、「彼は男なのだ——それだけだ！」(267, 強調原文) と思案する。

²⁴ アキレウスは、死の予言を受けスキュロス島でリュコメデス王の娘たちと共に少女の服で育てられていたが、オデュッセウスが商人に変装して島を訪れ、剣に興味を示したアキレウスの正体を見破り、彼を連れ帰る。Ewers, S. 83–86.

²⁵ 聖キュマーニス (Kümmernis) は、聖女ウィルゲフォルティスとしても知られ、異教徒の王との結婚を望まず神に祈ったところ髪が生えたという。この乙女のフレスコ画の幻影は、ヤンが礼拝堂を再訪した時には消失していたが、彼は「従妹アンドレアもそのような長くて黒いひげを生やすのだろうか」(354) と思案する。Ewers, S. 339–341, 348–355.

²⁶ Krüger-Fürhoff und Nusser, S. 91–92.

²⁷ Runte, „(Er-) Kranken am Geschlecht,“ S. 205. Vgl. Knobloch, S.

137.

²⁸ ケヴィン・アミドンは、ヒルシュフェルトは彼の著作において精密な個人の性生活の語りと細胞写真等の視覚的証拠の双方を用いることで、自身の研究に科学的説得力を付与しようと努めたと指摘する。Kevin S. Amidon. “Per Scientiam ad Justitiam: Magnus Hirschfeld’s Episteme of Biological Publicity.” In: *Not Straight from Germany: Sexual Publics and Sexual Citizenship since Magnus Hirschfeld*. Eds. by Michael Thomas Taylor, Annette F. Timm, and Rainer Herrn. (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2017), pp. 191–211.

²⁹ ヘラは「男の二つの生殖腺のうち、ひとつで全く十分である」(411) ことから、新聞に広告を出して金銭を対価に手術に用いる生殖腺を買い求めた。Ewers, S. 410–411.

³⁰ 欠損した耳を移植する場合、まず耳の上半分を移植しつつ下半分はドナーにつけたまま残し、やがて上半分が癒着したのちに下半分を切り離す方法を、ヘラは「人間の共生」(414) の例として挙げる。Ewers, S. 413–414. ヌッサーはこの架空の手術法について、ルネッサンス期イタリアの上腕の皮膚から鼻を再建する造鼻術からの援用を指摘している。Nusser, S. 150.

³¹ 19世紀末から20世紀初めにおける性ホルモン研究については、Nelly Oudshoorn, “Endocrinologists and the Conceptualization of Sex, 1920–1940.” *Journal of the History of Biology*, 23. 2 (1990): 163–186.

³² Magnus Hirschfeld. *Geschlechtskunde*. Bd. 1: *Der körperseelischen Grundlagen*. (Stuttgart: Julius Püttmann, 1926), S. 592.

³³ 手術後に銀行家パーカーは、「自然に反し (gegen die Natur)、神の意志に反して振舞った」(441) とヤンに対して後悔を漏らす。

³⁴ クリューガー＝フューホッフは、「性的アイデンティティの自然化と生物学化に従事した1920年頃の内分泌学および移植外科学的言説に、《めつけ鳥》は、医学的に造り出された精力と生殖力の参照で連なる」と指摘する。Irmela Marei Krüger-Fürhoff. *Verpflanzungsgeschichte: Wissenskulturen und Poetik der Transplantation*. (München: Wilhelm Fink, 2012), S. 94.

³⁵ 「アンドレア / スは同時に、子供にとって社会的かつもしかしたら遺伝的父、および社会的母であり、そしてヤンの女性的 / 男性的恋人かつホモソーシャルな分身として機能するので、子供の生物学的かつ遺伝的母としての看護師はこの三角形において『懐胎者』としての機能しかない。」Nusser, S. 157. Vgl. Jones, p. 328.

³⁶ 「男性の身体に閉じ込められた女性の魂 (anima muliebris virili corpore inclusa)」というフレーズは、1860年代にドイツの法学者カール・ハインリッヒ・ウルリヒス (Karl Heinrich Ulrichs 1825–1895) が同性愛の説明に用いて以来、世紀転換期にも参照された。Vgl. Heiko Stoff. „Vermännlichung und Verweiblichung: Wissenschaftliche und utopische Experimente im frühen 20. Jahrhundert.“ In: *Wahrnehmung und Herstellung von Geschlecht*. Hrsg. von Ursula Pasero und Friederike Braun. (Opladen und Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, 1999), S. 47–62, hier S. 53.

³⁷ ヒルシュフェルトはこの一元論者同盟の枢要な会員の一人であり、ヘッケルとは科学主義的な世界観の普及において協力関係にあった。Florian Mildenberger. „Magnus Hirschfeld und der Monismus: Wechselseitige Befruchtung oder Austausch von Irrtümern?“ *Würzburger medizinhistorische Mitteilungen*, 26 (2007), S. 75–109. Vgl. Magnus Hirschfeld. „Ernst Haeckel und die Sexualwissenschaft.“ In: *Was wir Ernst Haeckel verdanken: Ein Buch der Verehrung und Dankbarkeit*. Bd. 2. Hrsg. von Heinrich Schmidt. (Leipzig: Unesma, 1914), S. 282–284.

³⁸ Ernst Haeckel. „Gonochorismus und Hermaphroditismus[sic!]: Ein Beitrag zur Lehre von den Geschlechts-Umwandlungen (Metaptosen).“ *Jahrbuch für sexuelle Zwischenstufen*, 13 (1913), S. 259–287, hier S. 287. 強調原文。

³⁹ Th. Ramien(=Magnus Hirschfeld). *Sappho und Sokrates: Oder wie erklärt sich die Liebe der Männer und Frauen zu Personen des eigenen Geschlechts?* (Leipzig: Max Spohr, 1896), S. 9–10. 強調原文。

⁴⁰ Magnus Hirschfeld. „Petition an die gesetzgebenden Körperschaften des deutschen Reichs behufs Abänderung des § 175 des R.-Str.-G.-B. und die sich daran anschliessenden Reichstags-Verhandlungen.“ *Jahrbuch für sexuelle Zwischenstufen*, 1 (1899), S. 239–280, hier S. 240. 強調原文。

⁴¹ ヘッケルおよび彼の生物発生原則については、佐藤恵子『ヘッケルと進化の夢——一元論、エコロジー、系統樹』工作舎、2015年。

⁴² Magnus Hirschfeld. *Geschlechtskunde*. Bd. 1: *Die körperseelischen Grundlagen*. (Stuttgart: Julius Püttmann, 1926), S. 546.

⁴³ Hirschfeld, *Geschlechtskunde*, S. 548. 1929年に出版された『カーマストラ』のドイツ語版では、エーヴェルスとヒルシュフェルト両名が前書きを寄せている。Ferdinand Leiter und Hans H. Thal (Hrsg.) *Das Kamasutram des Vatsyayana*. (Leipzig und Wien: Schneider, 1929), S. V–XV.

⁴⁴ シンシア・イーグル・ラセット『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』上野直子訳、工作舎、1994年。反復説の社会的影響については、ステイーヴン・J・ゲールド『個体発生と系統発生——進化の観念史と発生学の最前線』仁木帝都、渡辺政隆訳、工作舎、1987年、176–245頁。

⁴⁵ Paul Topinard. *Anthropology*. Trans. by Robert T. H. Bartley (London: Chapman and Hall; Philadelphia: J. B. Lippincott, 1878), p. 526.

⁴⁶ Ramien, S. 15. 強調原文。サイモン・ルベイ『クィア・サイエンス——同性愛を巡る科学言説の変遷』伏見憲明監修、玉野真路、岡田太郎訳、勁草書房、2002年、20頁。

⁴⁷ 社会学者ライナー・ヘルンは、19世紀末に性科学者リヒャルト・フォン・クラフト＝エービング (Richard Freiherr von Krafft-Ebing 1840–1902) らによって、「性混交性は、それ自体、進化的に成立した二元論的性秩序の先祖返りの後退や頹廃症候と解釈された」(S. 177) と述べており、また同性愛者の解放を目指したヒルシュフェルトも両性具有を退化と捉えていたと指摘している。Rainer Herrn. „Magnus Hirschfelds Geschlechterkosmos: Die Zwischenstufentheorie im Kontext hegemonialer Männlichkeit.“ In: *Männlichkeit und Moderne: Geschlecht in den Wissenskulturen um 1900*. Hrsg. von Ulrike Brunotte und Rainer Herrn. (Bielefeld: transcript, 2008), S. 173–196.

⁴⁸ エーヴェルスは通俗科学書『蟻』(Ameisen, 1925) では、精密科学に対する批判の中でヘッケルの名も挙げ、「私は長い間、一元論者たちのもとで豚の番をし、ダーウィンとヘッケルの不毛な土地を耕した。[...] 魂の永遠の謎を因果機械学的理解に、指一本の幅だけでも近づけることに、彼らの誰も成功しなかった」とより直接的に批判している。Hanns Heinz Ewers. *Ameisen*. (München: Georg Müller, 1925), S. 521–522. 強調原文。

⁴⁹ Ernst Haeckel. *Gemeinverständliche Werke*. Bd. 2: *Natürliche Schöpfungsgeschichte. Zweiter Teil*. Hrsg. von Heinrich Schmidt. (Leipzig: Alfred Kröner; Berlin: Carl Henschel, 1924), S. 250–251.

⁵⁰ 「かくしてエロス、恋とは、失われた半身 (better half と言われたりする) を得て、片割れ同士が切断以前の全体を回復したいという熱い願いに他ならない。切断された〈二〉が原初の全体たる〈一〉を愛求して、合一へ至ろうとするダイナミズムである」。プラトン『饗宴——訳と詳解』山本巍訳、東京大学出版会、2016年、216頁。

⁵¹ 性転換手術前のアンドレアは「間もなく蛹化するだろうことを感じている幼生 (ein[e] Larve, die fühlt, daß sie sich bald verpuppen wird)」(39) とされており、実際には彼女の方がヤンにとっての

理想的段階に近いことが示唆される。

⁵² Kirill Rossiianov, “Beyond Species: Il’ya Ivanov and his Experiments on Cross-Breeding Humans with Anthropoid Apes,” *Science in Context*, 15.2 (2002): 277–316.

⁵³ Nusser, S. 153.

Die Phantasmen der sexuellen Umwandlungsoperation und des Hermaphroditismus: Die evolutionären Diskurse in Hanns Heinz Ewers' *Fundvogel*.

Naoyuki SOMA

In seinem Roman *Fundvogel* (1928) beschreibt der deutsche Schriftsteller Hanns Heinz Ewers (1871-1943) das Leben von Andrea Woyland, die sich wegen ihrer Abneigung gegen ihr weibliches Geschlecht und zwecks der Heterosexualisierung ihrer lesbischen Beziehung mit Gwynie Briscoe entschließt, sich durch die deutsch-jüdische Ärztin Hella Reutlinger einer Geschlechtsumwandlungsoperation zu unterziehen. Diese Operation ist von medizintechnischem Erfolg gekrönt, aber Gwynie begeht ihren Selbstmord, denn sie kann ihren Geliebten, der jetzt sein gewünschtes Geschlecht erworben hat und Andrea heißt, nicht akzeptieren. Nach ihrem Tod empfindet Andreas freundliche sowie homosoziale Verbindung mit ihr/seinem Vetter Jan Olieslagers und beschließt die Rückkehr in die Heimat. Während dieser Roman wegen der Missachtung dieses Schriftstellers als trivialen populären Bestsellerautor und infolge seiner Mitarbeit mit der NSDAP vernachlässigt wurde, erörtern neuere Forschungen insbesondere die Einflüsse der medizinischen Diskurse und des männerfreundschaftlichen Gedankenguts in der Zwischenkriegszeit auf den interdisziplinären Standpunkt sowie die Genderstudies. Dieser Artikel konzentriert sich auf den „Hermaphroditismus“, denn dieses Motiv wird im Roman immer wieder jenseits der Geschlechtsumwandlung für das wirkliche Ideal der Charaktere gehalten. Außerdem erörtert die vorliegende Arbeit die Einflüsse der damaligen Naturwissenschaften, die solche Zwitterbildung um „wissenschaftlicher“ Lösung der schwulen Probleme willen als einen biologischen Grund für Homosexualität betrachteten.

Die Operation im Roman reflektiert einerseits die wirkliche zeitgenössische Wissenschaft wie Auswirkung der Drüse und Hormone auf geschlechtliche Reife, Eigenschaften und Triebe, die der berühmte Sexologe Magnus Hirschfeld (1868-1935) und der Physiologe Eugen Steinach (1861-1944) erforscht haben. Andererseits werden fiktive Methoden in die Erklärung der Geschlechtsänderung gemischt: die durch drei „sie-es-er“ Stufen

allmählich durchgehende Umwandlung und das Prinzip der Symbiose. Diese Ideen deuten schon darauf hin, dass es bei *Fundvogel* nicht nur um das Überschreiten der geschlechtlichen Grenze, sondern auch um die Vereinigung der dualistischen Geschlechtlichkeit geht. Deshalb träumt Hella von der Einpflanzung eines empfangenen Uterus in einen entmannten Mann, der selbst im Voraus diese Gebärmutter befruchtet, allerdings fungiert diese Voraussage auch als ein Scherz gegen den Hochmut der Naturwissenschaft. Dieser Wunsch Hellas wird zwar durch Andreas teilweise verwirklicht, denn diese jetzt einen männlichen Körper besitzende Ex-Dame bleibt immer in den Augen seines Vetters eine geistige Frau. Aber die Verkörperung des berühmten Denkspruchs „*anima muliebris virili corpore inclusa* (eine feminine, in maskulinem Körper geschlossene Seele)“ ermöglicht nicht die Vereinbarung der Fortpflanzungsfähigkeit im Einzelwesen.

Damit er solche an wissenschaftlichen Fortschritt glaubende Biotechnologie ironisiert und echten Hermaphroditismus demonstriert, bezieht sich Jan nicht auf die hormonologischen Erkenntnisse, sondern auf ein primitiveres Tier; den Bluteigel. Die Einführung dieses symbolischen Tieres spiegelt den damaligen evolutionsbiologischen Diskurs wider, dessen These der einflussreiche deutsche Biologe Ernst Haeckel (1834-1919) vertrat. Laut Haeckel hätten alle Lebewesen ursprünglich Zwitterbildungen. Des weitern hätte sich die Trennung von Männchen und Weibchen bei höheren Organismen im Verlauf der Evolution schrittweise entwickelt. Aufgrund „des biogenetischen Grundgesetzes“, welches besagt, dass die Entwicklung des Einzelwesens die verkürzte Wiederholung seiner Stammesgeschichte sei, folgert er, dass selbst der Mensch am Anfang seiner Ontogenese hermaphroditisch sein müsse. Aus dieser ontogenetischen und phylogenetischen Forschung hielt Hirschfeld die angeborene geschlechtliche Mischung im Einzelwesen für die Ursache von Homosexualität. Aber diese auf dem biologischen

Grundgesetz und dem Hermaphroditismus der primitiven Lebewesen basierende Erklärungsweise ist problematisch, denn sie kategorisiert die homosexuellen Menschen als die unreifen Missgebildeten, die auf dem Weg der Entwicklung zum „vollkommenen“ Mensch atavistisch gestört werden. Evolutionsbiologische Diskurse, die heterosexuelle weiße Männer als den Gipfel der Evolution ansehen, führen nicht zur Emanzipation der Homosexuellen aus gesellschaftlichen und kulturellen Diskriminierungen, sondern zu ihrer naturwissenschaftlich rechtfertigten Pathologisierung.

Jan, der einerseits scharfen Spott mit Haeckel treibt, missbraucht andererseits die evolutionsbiologischen Diskurse durch seine Sehnsucht nach den primitiven Tieren. Er bezieht sich neben Blutegel auf Seescheide, die im Verlauf ihrer Entwicklung die herumschwimmende Beweglichkeit verliert und auf dem Seeboden träge verklumpt, als das Ideal seines Wanderlebens. Für ihn bedeuten solche unentwickelten Tiere nicht die „niedrige“ Phase des Fortschrittes, sondern das hoffnungsvolle Vorbild. Der paradoxe Lobgesang auf diese primitiven Lebewesen verhöhnt, dass das zukünftige Ideal der Wissenschaft schon längst in der Natur verwirklicht ist, und kritisiert die evolutionsbiologische

Anschauung, die menschlichen Hermaphroditismus in rückschreitende Abnormalität einteilt und zur Feststellung des Vorurteils gegen Homosexualität durch (pseudo-)wissenschaftliche Ergebnisse beiträgt. Außerdem zeigt Andrea/-s die Unfähigkeit der Naturwissenschaft zur Lösung der geschlechtlichen Probleme durch die „Puppe“-Metaphorik. Indem Andrea während ihrer Geschlechtsumwandlungsoperation erzählerisch in den Ursprung der Phylogenie zurückkehrt, verkörpert sie die zeitliche Symbiose beider Geschlechter. Jan, der nur auf den niedrigen Lebewesen seine Hoffnung projiziert, kann niemals einen hermaphroditischen Zustand in Andrea/-s erkennen.

Der sensationelle Biopunk-Roman *Fundvogel*, der die naturwissenschaftlichen Diskurse mit seiner Einbildungskraft in einen fiktiven Text integriert, drückt zugleich Skepsis gegenüber dem Hochmut von Wissenschaft und Technologie in Bezug auf die mechanistische Auffassung der Lebenserscheinungen und die künstliche Manipulation des menschlichen Körpers aus. Außerdem zweifelt der Roman die damaligen evolutionsbiologischen Diskurse an, die Homosexualität durch die Zwitterbildung der primitiven Tiere sowie das biologische Grundgesetz erklären und die Homosexuellen als „niedrigeres Dasein“ pathologisieren.